

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：10105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26450300

研究課題名(和文) 畜産農家間の風評被害発生メカニズムと低減方策としてのリスクコミュニケーション

研究課題名(英文) Mechanism of harmful rumor occurrence among livestock farmers and risk communication as its reduction strategy

研究代表者

宮崎 さと子(窪田さと子)(Kubota-Miyazaki, Satoko)

帯広畜産大学・畜産学部・助教

研究者番号：90571117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、家畜伝染病や届出伝染病の清浄化後も精神的・経済的負担になると考えられる畜産農家間の風評被害に着目し、その実態とメカニズムを明らかにした。地域内の人間関係の親密さは、決して風評被害の軽減につながるわけではない。したがって、コミュニケーションマニュアルを事前に設定することが必要である。また、届出伝染病である牛白血病ウイルス感染牛発生農家に対する忌避行動と情報開示意志には、情報処理過程とそれに関連する心理的要因が係っていた。

研究成果の概要(英文)：This research has focused on the harmful rumor among livestock farmers that are considered to have mental and economic damage even after elimination of infectious animal disease or notifiable infectious disease. The actual condition and its mechanism were clarified. The close relationship among people within the local area does not reduce the spread of the harmful rumors. Therefore, it is necessary to make a communication manual in advance. In addition, information processing and psychological factor were involved in the evasive behavior and information disclosure intention to the bovine leukemia virus-infected farm.

研究分野：農業経済学

キーワード：風評被害 家畜伝染病 リスクコミュニケーション 地域コミュニティ 情報処理過程

1. 研究開始当初の背景

2010年に発生した口蹄疫は畜産農家のみならず、様々な業界に経済的被害を及ぼしたことは広く知られるところである。その中には、「風評被害」による損失も含まれている。消費者がメディアやソーシャルメディアを通して、情報（不確実なものも含め）を大量に入手できるようになったことにより、事件や事故等が発生した場合の「風評被害」をいかにコントロールするかということが、昨今大きな課題になっている。

一方で、家畜伝染病法に規定されている家畜伝染病や届出伝染病に焦点を当てた場合、フードシステムの川下から発生する風評被害のほかに、川上から発生する風評被害も考えられる。これはつまり、家畜伝染病等が発生した農家に対する同業者からの風評被害である。例えば、清浄化を達成していても牛の移動に関し車両の手配が困難であったり、人手のほしい状況で集まらなくなったりすることを指す。

このような状況は、家畜伝染病等発生に対する行政の支援がなくなった後も続いていくため、当該畜産農家にとっては精神的・経済的に大きな負担となる。また、風評被害を恐れるあまりに、本来公表すべき情報を隠蔽する不適切な行動がとられる可能性も考えられる。畜産農家間の風評被害は、「村八分」として畜産農家自身が認識していると推察されるが、そのコントロールを目的とした研究蓄積はないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、畜産農家間の風評被害の実態と影響の大きさを整理し、どのようなメカニズムが存在しているのかを明らかにすることである。その上で、畜産農家を対象としたリスクコミュニケーションのあり方を検討する。特に、畜産農家の意思決定や行動モデルをプロスペクト理論や決定ヒューリスティック等に代表される行動経済学の理論に基づいて実証的に解明し、相互に不利益となるはずの行動が実際に生じてしまう要因を明らかにすることで、個別の経営体を対象とした支援方策の検討が可能になると推察される。

3. 研究の方法

(1) 畜産農家間の風評被害の実態に関する研究

パーソナル・ネットワークやソーシャル・キャピタル等、地域コミュニティに関連する指標を用い、家畜伝染病や届出伝染病が起こった場合（または起こったと想定した場合）の風評被害との関連性について明らかにした。パーソナル・ネットワークは人間関係の密接度であり、ソーシャル・キャピタルは、個人の信頼・ネットワーク・社会活動への評

価や参加程度を通じて、地域の満足度や地域コミュニティ全体の特徴を明らかにするものである。畜産農家間の風評被害は、自らの農場に家畜伝染病等のリスクが侵入することを避けるために発生すると考えられることから、通常の場合では比較的狭い範囲の中で起こるものと推察される。したがって、地域コミュニティに関する指標が、畜産農家の行動に密接に関連するだろう。以上を把握するために、畜産（酪農・肉牛・養豚）を行っている農家を対象としたアンケート調査を実施した。

また、地域の家畜伝染病等の発生と情報伝達について状況を把握するために、北海道のA町および九州のB市において、自衛防疫組合やNOSAI、農業協同組合を対象に聞き取り調査を行った。

(2) 畜産農家間の風評被害メカニズムに関する研究

家畜伝染病等発生時の報告インセンティブと適切な行動に対しては、情報の透明化が必要である。調査対象を、牛白血病（EBL）を引き起こす牛白血病ウイルス感染とし、地域内の人間関係や個別農家の情報処理過程に繋がる心理的側面が、牛白血病ウイルス感染牛発生農家への忌避行動や情報公開の意志に与える影響を、構造方程式モデル（SEM）により推定した。

当該推定モデルは、消費者の風評被害メカニズムを研究した工藤・中谷内（「東日本大震災に伴う風評被害：買い控えを引き起こす消費者要因の検討」社会心理学研究、30(1): 35-44、2014）を参考に、忌避行動や情報開示意志に与える影響を推定するモデルを作成した（図1）。

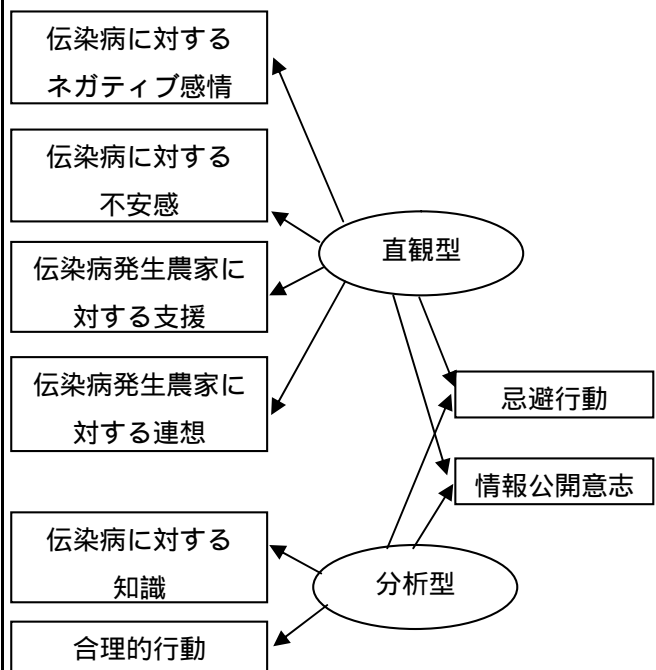


図1 畜産農家間の風評被害メカニズムモデル
 註：四角は観測変数を楕円は潜在変数を示す。

潜在変数で示した「直観型」および「分析型」は、二重過程理論に基づいた分類である。感情的思考モードに関連した直観型と、論理的思考モードに関連した分析型があり、それぞれの要因群は先の工藤・中谷内の研究にならって振り分けた。

以上の分析を進めるために、北海道および九州の酪農家・肉牛農家を対象としたアンケート調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 畜産農家間の風評被害の実態に関する研究

地域コミュニティの醸成と信頼関係には相関関係があるが、それらの関係が風評被害の発生抑制に貢献しているわけではない。むしろ、地域内の同業者や農協職員と親密であると回答した約 20.2%の畜産農家が、家畜伝染病や届出伝染病の発生による地域内での「付き合いの変化」に懸念を頂いていることが明らかとなった。具体的に自由回答で不安な点を尋ねたところ、「疑心暗鬼や疎外」「責任のなすりあい」「村八分」が順に並んだ。一方で、「特に不安がない」と回答している畜産農家は 25%存在しているが、特性は様々であり地域コミュニティに関しても特徴はみられなかった。

聞き取り調査の結果から、北海道の A 町、九州の B 市のいずれの地域においても、家畜伝染病等が発生した場合の迅速な対応に関して体制構築がなされているが、地域内のコミュニケーションマニュアルは存在していなかった。各関係機関から得られた知見は以下の通りである。

地域内の人間関係の親密さは、孤立や加害者になることを避けたいという恐怖心を生むことにつながる。

周囲に伝染病が蔓延することを恐れ、淘汰を進めていると返って疎遠になる。

報道のあり方によって誤解や必要のない警戒心を生んでいる。

以上から求められるのは、情報を適切な時期に適切な機関（もしくは本人）から公開することであり、透明性の高さが報告のインセンティブや対応の迅速化につながると考えられる。

(2) 畜産農家間の風評被害メカニズムに関する研究

牛白血病ウイルス感染牛の発生は、回答した農家の約 2 割であり、過去に発生経験があるほど防疫対策が重要視されていた。

過去の発生経験の有無による付き合い方の変化（忌避行動）や情報公開意志を表 1 に示す。過去の経験を有する農家においては、発生場所の区別なく意志が一貫している。また、忌避行動は積極的な情報公開意志につながっている。その背景には、発生経験があることで感染のリスクを認知していることが

あげられた。情報公開によって自らのリスクを避けること、他農場へも注意喚起を促すことを求めていると推察される。ただし、過度にリスクを捉えることにより、風評被害につながる恐れもある。一方で、過去の経験がない場合、忌避行動を示す農家の割合が比較的少ない。当該農家においては、牛白血病の防疫対策も消極的であり、感染のリスクを認識していない可能性が示唆される。また、自農場で発生した場合の情報公開意志が低い結果となった。地域内で村八分になることを避けたいとの理由のほか、消費者からの風評被害も危惧されていた。未知なものに対する漠然とした不安感が存在していると考えられる。

表 1 牛白血病ウイルス感染牛の発生経験有無による忌避行動・情報公開意志

	経験有	経験無
自農場で発生した場合、付き合い方を変える	66.7%	19.1%
他農場で発生した場合、付き合い方を変える	66.7%	14.3%
自農場で発生した場合、情報公開をしたい	66.7%	52.4%
他農場で発生した場合、情報公開してほしい	66.7%	61.9%

表 2 SEM の分析結果

	推定値	p 値
ネガティブ感情 直観型	0.50	-
不安感 直観型	0.78	0.02
農家支援 直観型	0.76	0.02
農家連想 直観型	0.72	0.02
知識 分析型	0.73	-
合理的行動 分析型	0.41	0.05
忌避行動 直観型	0.23	0.03
忌避行動 分析型	-0.20	0.03
情報公開意志 直観型	-0.67	0.07
情報公開意志 分析型	0.69	0.07
CFI	0.71	
RMSEA	0.10	

表 2 には、SEM の結果を示す。知識と合理的行動は、忌避行動にマイナスの、情報公開にプラスの影響を与えている。その他の直観型に関連する感情要因からは、逆の傾向が示された。したがって、過去の経験に裏打ちされた感染に対するリスク認知は、さらに合理

の行動要因があつて、情報公開と風評被害の回避につながる。また、消費者の風評被害メカニズムと異なる点は、家畜伝染病等発生農家に対する支援感情もまた、忌避行動に繋がっている点である。同業者として支援したい一方で、自農場へのリスクは持ち込みたくないといった特有の関係性が明らかとなった。

(4)研究協力者 ()

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

窪田 さと子 (KUBOTA SATOKO)
帯広畜産大学・畜産学部・助教
研究者番号：90571117

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：